

『四街道を知ってるか?』

YOCCA ニュース 7 号の「四街道を知ってるか?」は、四街道の小学校につながるの深い YOCCA の前田さんとの会話から始まった。生徒にかなりの数のムスリムがいて、彼らは学校給食が食べられないという共通の問題を抱える。家からお弁当を持ってこなければいけないのだ。それどころか、彼らは学校のものを何も食べられない。たとえば、学校の餅つきイベントでは、餅をつく作業には参加しても、ついたもちを食べるには至らない。前田さんはもう少し調べてみるのにふさわしい話題なんじゃないかと提案してくれた。

アフガニスタン人、バーミヤン、ARIAN*¹ (* 1 : レストラン名、“牡羊座”の意)

四街道の外国籍市民のなかで一番多いのはアフガニスタン人だ。2位は中国人、3位はフィリピン人である。千葉県他の地域では、10位にさえ入らないアフガニスタン人が1位であるということは四街道地域独特のことであるといえる。アフガニスタン人の多くは車や、車の部品の輸出業に従事している。YOCCA の小島さんによるとこの業種は、最初に東京の江戸川周辺で始まったということだが、東京の不動産がどんどん高価なものになったことに伴って、彼らは四街道に移ってきたとのことだ。個人的に言えば、私が最初に四街道に引っ越してきた時にバーミヤンという、食料品も扱うアフガニスタンのレストランを発見して大変うれしくて、オーナーと楽しくおしゃべりをしたことがある。それは、私がアメリカにいるときに常食していた小さな平たいマメ、レンティルを唯一手に入れることのできる場所だった。

何年前かにバーミヤンが閉店したのを知ってとても寂しかったが、最近 ARIAN (エアリアン) という“ハラル”食料品&レストランを四街道の大通り沿いの大日郵便局の向かい側に見つけた。そこでは、なつかしいインゲンマメ、デザート、ヤギのチーズ、乾燥アプリコットやハルヴァ*² (* 2 : 中東を起源としてアジア中南部に広がったナッツ、豆類、野菜などを使った甘いお菓子)、珍しいザクロジュースやさいころ型のヤギ肉などの食料品を売っていて、それらは他のどこでもなかなか手に入れないものだ。

“ハラル”って? サダフを訪問

“ハラル食料品店”でショッピングを楽しむにもかかわらず、私は“ハラル”という言葉が何を意味するのかについては何も知らなかった。ハラルについてもっと知るために YOCCA の矢崎さんがサダフというレストランを紹介してくれた。そのオーナーは私たちの質問に答えてくれるという。四街道の中心部の国際交流が盛んにおこなわれている地域にある、小ぶりで居心地のいいレストラン、Arian とちがって、Sadaf は知らなければそこにあるということがなかなかわかりづらい場所にある。四街道のすぐ北の佐倉のヤードに囲まれたところにある。しかし、敷地はとても広く、庭や噴水、戸外にテーブルも置いてあり、100人ほどのゲストを読んでの結婚式にも十分対応できる広さがある。レストランの中も同様、パーティーもできるほど広々している。

サダフの二人の従業員、アフザル・カーンさんとマリアンさんが私たち取材スタッフ(前田さん、矢崎さん、白石さん、そして私)の質問に答えるために、時間を割いてくださった。

Halal (ハラル)とは、「合法的」、とか「許された」という意味で、食料、多くは食肉に関することである。それは、どの動物が食料として食べてもいいのかということを細かく説明してある。一番知られているのは豚肉が禁止されていることだが、牛、子羊、羊、鶏そして山羊の肉はすべて受諾されている。しかしながら、同じように重要なのは、そういう動物が食用にされるためにどのように解体処理され、扱われるかということである。

これは動物が私たちに命を捧げてくれることに対する感謝の念を表すということであり、食としての純度を保つためである。

学校給食に関して、ここで問題になるのは・・・アルコール!アルコールは“Haram”(ハラム)～「許されない」ものである。多くの香辛料や調味料(例えばチューブ入りのすりおろししょうがとか)はアルコールを保存料として

含有している（醸造酒と表記してある場合もある）。これは日本料理に欠かせない基本のふたつー醤油とめん料理のめんつゆも例外ではない。つまり、たとえ豚肉のっていない料理が用意されたとしても、アルコールが含まれているかどうかということ自体、ほぼ不可能にちかいことだ。だから、餅つきイベントがイスラム教徒の生徒にとって気の進まないものであるということを知ってもらえると思う。

成田空港にはハラル料理のレストランがあり、そこにはラーメンもある。神田外語大学のカフェにはやはりハラル料理のメニューがある。四街道の業務スーパーでは幅広い種類のハラル食材を扱っている。

ハラルとして認定されている食材にはそのパッケージに小さなマークがついている。それは多くの場合緑の丸に英語とアラビア語で“Halal”と書いてある。そのハラルマークは、何ら肉やアルコールを扱わない商品、例えば、乾燥マメの袋などのパッケージにも表示されている。サダフの経営者は、ハラルマークは、むしろ、パッケージする施設や設備について、ちゃんと適切な清潔な場所で取り扱われたことを表すものだと言明した。確かに、私の経験でも、イスラム教徒が経営する店で買ったインゲンマメは日本の店で買うより安く、アメリカで買っていたものよりもはるかに品質が良かった。

食文化と異文化交流

私は、学校がイスラム教徒の生徒たちに配慮をした学校給食を作るために、どれだけ前へ向けてのステップを踏めるだろうか、とても興味がある。もちろん、毎給食でそうすることということではない。また、肉と野菜の鍋を別にしたらどうかという私のアイデアもさして重要ではないと思われる。（“鍋はいつも洗えばいい”）ただ、1つのステップとして、このメニューはイスラム教徒の生徒たちにも完璧に大丈夫だよと分かるようにすること、そして、家庭に配布する給食メニューに“H”のように、マークを付けることはできるのかもしれないと思う。また、アルコールを含まない調味料、醤油やめんつゆを使って、それを家庭の両親にも伝えるということももっとシンプルな1歩かもしれない。

ハラルというのは日本文化が大事にしてきた、食べ物は命をつなぐために犠牲にするもの、だから、敬意と感謝をもって扱わなければならないという考え方の1つの表現なのではないかという思いが私をとらえた。また、私たちの健康と幸せは私たちが選び食べたものそのものの直接の結果である、ということ。日本語の“いただきます”はもちろん、食事を用意してくれた人に対する感謝の気持ちを表すしぐさであるけれども、また、食べ物そのものに対する感謝の表現でもある。

おそらく、最初の1歩は、相互理解を深めるということだろう。小学校の生徒や先生が、イスラム教の生徒たちにとって、母親の作ったものでないものを食べるということがなぜ都合の悪いことなのか理解をすることが、彼らが、日本食を口にしようとしなない不可解な食文化のよそ者であるという間違った認識を打ち破ることになる。そして、イスラム教徒の親たちが、学校給食で使われている材料についての情報を与えられて、また、学校給食の調理員がハラルの基礎知識について心得ていると確信が持てれば、彼らは学校でのすべてにおいて、もっと神経をとがらせなくても良くなり、これから先、学校の食のイベントに積極的に参加させることができるようになるのではないかと。私は、小学校でのALT（英語補助教員*訳者注）としての経験から、子どもたちにとって、給食の時間というのは、どういう風におしゃべりをし、きずなを深め、友達を作るかを学ぶ場所であると知っている。給食の時間をもっと不可解で心配なものでなくすること、その代わりに好奇心を育てるというシンプルな1歩を積み重ねることが次世代にとり、文化間のつながりを深めていく長い道に向かって踏み出すことになるのではないかと。

YOCCA ニュースで私が許された他のどのインタビューとも違って、今回のケースでは私自身の考えや、意見は重要ではない。ハラルや学校給食に対する疑問は、私の文化とはまた違う2つの文化の間に生じた論点である。四街道に住むイスラム教徒のこと、そして、日本の中東諸国との歴史的な結びつきを考えると、YOCCA のスタッフの方が私よりもより情報も得ているし、うまくつながっている。私もまた、アメリカ出身者で、そのアメリカはイスラム世界とうまく付き合えているとは言えない状況で、このことについて質疑をする以外に、議論に参加するのに特にふさわしいとも思えない。私はしばしば、日本に住む外国人として、「他の外国人とよりよい関係を築くことができ当然だ」というような意見に出くわしてきた。この記事を書くという経験が、その単純な考え方の中の間違いを完璧にはっきりさせてくれた。YOCCA の仕事は「外国人とのつながりを深めること」ではなく、複雑に絡み合った、興味や文化のクモの糸のなかから、共通の背景や、共通の糸を見つけだすこと、そして、そのことが世界を一つに結び、日本もその中のひとつの国となることのできるのだ。

移民と将来

そしてまた、今までの記事にはなかったことだが、この話題は過去よりも将来についてより語ることになる。日本は、世界中のたくさんの国が向き合っている「移民をどうするか」という問題についても取り組んでいるところだ。アメリカは当初から移民の国で、常に苦闘し続けてきた。1つの例として、イタリア人の移民の波が19世紀の終わりに混乱をおこし、非友好的な差別を巻き起こした。「私たちと彼ら」という環境に面と向かうことで、彼らは限られた隣人のみとつながり、集中することになった。それはひいては、アメリカーイタリアマフィアを生む土壌となった。（日本ではたぶん在日韓国人にかんして同じような話があると思う。）「ヤンキー」という言葉もイギリス人によって、植民地のオランダ人移民をあざけるためにつかわれた民族的蔑称「ヤンキーズ」から来ているともいわれる。そして、ご存知のように、アメリカで今年行われる大統領選挙ではメキシコの移民（彼らなしでは、アメリカの農業は完全に崩壊するだろうし、ブリトーやチリはピザと同じくらいもうアメリカ的なものであり、彼らは、必要不可欠な人々であるにもかかわらず）についてずいぶんとたくさんのことが話題になっている。ドイツは、1960年代の開発ブーム時に、トルコからたくさんの労働者を招いた「外国人労働者」問題があった。そして出稼ぎだったはずの労働者がドイツにそのまま残り住み続けるという決断をした時に、大変なことになったとぞっとすることになった。（私自身は、フランクフルトのトルコ人街の散歩を楽しんでいるとあって、ドイツ人の仕事仲間を意図せず不快にさせてしまったことがある。）一方でドイツのメルケル首相は彼女の政治生命を危険にさらして何百万のシリア難民を受け入れている。そしてフランスは、北アフリカを容赦なく植民地化したことでよく知られているが、その1世紀にわたる苦痛と恨みは、北アフリカの人々にフランスへの入国を許すことによっても簡単には消えてなくなるということに気が付いている。

日本は今、人口減少に直面している。もし、宮崎駿の映画「天空の城ラピュタ」で予測された未来のようになりたくなければ（雲の中に浮かぶ街にはもはや管理ロボットをのぞいては無人で、もはやかつてあったとされる巨大で恐ろしい世界は、伝説として残るのみである）日本は、今のうちにその国民や言葉、文化を完全なまま残す道を見つけるべきだ。私は、個人的に日本を応援している。日本はアメリカや、ヨーロッパよりはもっと賢くこの問題を解決できるという風に今のところ信じている。（訳：米家）